

## 村上鬼城論

野中常雄

Tuneo NONAKA

## (一)

よく一茶と比較される村上鬼城の句には、心をうつものがある。それはどこから来るのであろうか。ここで鬼城の境涯を考え、次に一茶と比較しながら、彼の人生観や作品の特質、特に庶民性等について考えてみたいと思う。

## (二)

村上鬼城、本名は莊太郎。慶応元年鳥取藩士小田平之進の長男として、江戸の藩邸に生れ、昭和13年9月17日74才で歿した。7・8才の頃、父に従い前橋を経て高崎に居を移した。11才の時、母方の村上姓をついだ。漢・英・法の諸学を学び、青年時代は軍人・司法官を志したが、いずれも耳疾のため、志を得ないで、生涯居を高崎にかまえて、代書を業として、ようやく暮しを立てていた。29才の時2女をのこして妻に死なれ、<sup>(註1)</sup>32才の時再婚、<sup>(註2)</sup>後には8女2男をかかえていたというから、衣食の上にも余裕はなかつたようである。

子規に手紙を出して、教えを乞うたのは、明治28年(鬼城31才)であつた。のち虚子の指導を受け、水巴・蛇笏・普羅などと共に、大正時代のホトトギスの代表的俳人となつた。大須賀乙字は、鬼城は芭蕉・一茶以後において、境涯の句を作つた唯一の俳人であると推称した。虚子は

「……しかしながら総じてこれをいえば君の境遇、並びに君の性格からくる強い主観が常に背景をなしていて、錚々たる響をなしていることは蔽うことはできぬ。私はある時君の句を推奨して、其一半の力は豊と貧からくるといつたところが、その人はそれでは不幸な境遇に立たねばいい俳句は出来ぬかといつた。必ずしもそうだということは出来ぬけれども、しかし現実生活の不幸は芸術の上に幸福となる場合が多い。鬼城君などもたしかにその一人である。」(高浜虚子全集、第10巻)

といつている。

この虚子の発言に関連して、ここで向井去来について少し考えてみよう、彼の句は入門早々から、  
初春や(元日や)家にゆづりの太刀佩かん

のように、すぐれたものであつたが、最後まであまり成長発展はなかつた。また句や文に歎きのあとも見られない。これは生涯定職もなくてすごせるような彼の生活から来ているようである。われわれの心を動かす力が足りないのは、そこに原因の一つがあると見ていいと思う。こう考えると結果から見て、去来の場合、境遇は彼の文学には何らプラスしてはいないと言えようし、反対に鬼城の場合は貧と豊とがプラスになつているということはたしかに言えよう。

しかし、文学の世界に於ても、貧しき者憐れむべき者が幸福だとは決して言えない。人間の小さな知慧と欲望とを捨てて真実を追求する時、貧富を問わず、人の心に迫る作品を物することができ

る。貧に泣き不具をかこつ人は多い。だが、ただそれだけで、それをわがものとし、それを超えて真実を追求し、表現にまで、もつていける人は少いのである。鬼城は十分とは言えないが、そこまで行くことの出来た一人である。

(註1)「俳句」(第3巻第10号)の加藤楸邨氏の「鬼城私抄」という文による。鬼城の「予若かりし時、妻を失い、二児を抱いて泣くこと十年、たまたま三末雄来る。これ予が、句作の初めなり、捨てんと思へど、捨つるに忍びず、美しきほど哀れなりはなれ鴛」を見ると、少し合点がいかないのであるが、伝記について細かく書いたものも見当たらないので、加藤氏の文によることにした。

(註2)「現代俳句下」山本健吉氏による。前記「鬼城私抄」には「鬼城は30才の時、代書業に転じたのだが、その前年2女を遺して妻に死なれ、32才の時再婚、47才で8女を設けるのだが……」とある。

## (三)

世を恋ふて人を怖るる余寒かな  
片隅に小さく寝たり冬座敷  
つめたかりし蒲団に死にもせざりけり

宇治の茶、万古の急須、相馬の茶碗、伊香保の盆、かぞへ来ればなかなか勿体なし

新茶して五ヶ国の王に居る身かな  
無芸無能いたづらに老いて六十四年

○ありがたくいただき申す雑煮かな

聾であり、貧であつた鬼城は人をおそれ、しかも人を恋うて世の片隅に、苦しみながら淋しい生に安んじていた。乙字は「鬼城句集」の序文の中に、次のように述べている。

また「真個に人間の苦しみを経来つて、人生の孤独ないし悲哀ということが本当に知れば、イヤでも真実に達すべく、而して一度真実に達すれば物我一如の境に達す」といわれたごとく、氏は自然に対して、まことの同情を有するがため、何物を詠じても直ちに、作者境涯の句となつてあらわれるので、句俳優の輩の遠く及ばざるところである。

はたして物我一如の境に達し、己の境涯をつき破り、己を超えて、いわゆる悟りの境地に達しているであろうか。

麦飯に何も申さじ夏の月  
死に死にてここに涼しき男かな  
露涼し形あるもの皆生ける  
死を思へば死も面白し寒夜の灯  
大南瓜これを敲いて遊ばんか

これらを讀むと、悟りに達しているようにも見える。松浦氏は、大南瓜の句に対して

このからつとした、わだかまりのない飄逸も、涙にうるむ人にして、はじめて味識されるだろう。生温かい生に死んで豁然として死の大悟を感じた時に、安心して歌えるものは、こういうものである。(中略)大南瓜を敲いて遊べば生という音も出る。同時に死という音も出る。而してこの遊びは遊戯ではなく救いである。涙の後の笑いである。(文学の絶対境)

と述べている。松浦氏の評は当つているであろうか。

女房をたよりに老ゆや暮の秋

思ひ悩むことあり

○御 仏 に す がる 涙 や 霜 の 声

正直者の鬼城はただ淋しいのである。しかし、そこから抜け出ようと、もがいたりはしていない。わたくしは悟りというよりは、いわば淋しさに安んじているといった感じがする。この淋しさ、あわれさを主観の色濃く表現している。主観の色が濃いということは前から評されていたことである。これは、ひとり鬼城だけではなく、大正初期のホトトギスの代表的作家たち（鬼城・水巴・蛇笏・石鼎・普羅）は虚子のいう「主観の涵養」に傾いた人たちであつた。鬼城の句も、今読み返してみても、その点が深く感じられる。「淋し」「哀れ」などという語をしきりに用いている。

う こん 桜 色 濃 く 咲 いて 淋 しい ぞ  
 若 荷 汁 に う つ り て 淋 し 己 が 顔  
 水 打 て ひ と り 淋 し く 端 居 かな  
 淋 し さ や 音 な く 起 つ て ゆ く 螢  
 淋 し さ や 聞 に さ し 入 る 居 待 月  
 淋 し さ に 早 飯 食 ふ や 秋 の 暮  
 白 魚 の 九 腸 見 え て 哀 れ な り  
 鷹 の つ ら き び し く 老 いて あ は れ な り

鬼城は子供に対する愛情はいわずもがな、弱小なもの、不具なものに対して深い愛情をよせている。

春 の 夜 や 灯 を 囲 み る 盲 者 たち  
 小 百 姓 う す く ら が り に 蚕 飼 かな  
 ○ 秋 風 や 手 引 つ れ た る 盲 医 者  
 夏 草 に は ひ 上 り た る 捨 蚕 かな  
 啞 蟬 の と ら れ て ぢ ぢ と な き に け り  
 永 き 日 や 寝 て ば か り る 盲 犬  
 大 雪 や 納 屋 に 寝 に くる 盲 犬

彼の生物への愛情には山本氏が「現代俳句」の中で指摘しているように、自己憐憫のかげがつきまといつている。ここに彼の句の調子の低さがあり、老醜をさえ感じさせるものがあるようである。

瘦 馬 の あ は れ 機 嫌 や 秋 高 し  
 冬 蜂 の 死 に ど こ ろ な く 歩 き け り  
 闘 鶏 の 眼 つ む れ て 飼 は れ け り  
 鮫 鱈 の 愚 に し て 咎 め な か り け り  
 老 猿 を か ざ り た て た り 猿 廻 し  
 花 の 色 も ほ の か に 老 木 桜 かな

散りいそぐ彼岸桜の老木かな  
 天高肥馬の候、肥馬の元気のよいのは当然である。瘦馬の場合、かえつて衰れを催させるものがある。これらの句には涙と共に苦笑がある。泣き笑いの表情である。ここに人間鬼城を見るような気がする。

木犀やあはれ目しひて能役者  
 相撲取おとがひ長く老いにけり  
 十年相見ざろ友の、彼も豊し我も豊す

○二 老 者 葛 水 飲 ん で 別 れ け り  
 これらの句は胸をうつものを持つている。

南瓜食うて驚馬の如くに老いにけり  
 活計にうとき書どもや寒夜の灯  
 麦飯に瘦せもせぬなり古男  
 だまされて泥亀ききに泊りけり  
 これらの句には自嘲のひびきが出ている。

風邪引いて目も鼻もなきくさめかな  
 禰宜達の足袋だぶだぶとはきにけり  
 接木してふぐり見られし不興かな

○補 聴 機 を 祭 つ て 年 を 送 り け り  
 補聴機の句にしても、不具を悲しむというよりも、飄逸の一面が出ているように感じられる。

#### (四)

鬼城はよく一茶と比較される。乙字は「一茶よりも句品のまさつた作者」といい、山本氏は一茶のようにひねくれた所がなく、人間的に暖く、諦観的で、世間を恐れ、宿命に安んずる風が見えるが、それだけに一茶のような鋭い皮肉や、反抗的な身ぶりは認められない。下性下根の庶民性を失わなかつた点では一致しているが一茶の方がはるかに妄執がはげしく、それだけ人間的苦悩も深刻で現れ方も一途であり、作家的人間的魅力に於て数等たちまさつている。(現代俳句下)

と論じている。わたしも山本氏のように、一茶の方に魅力を感じている。

わずかの遺産をめぐつて、一茶兄弟の確執はひどかつた。いく度か帰郷して解決をせまり、父の歿後13年ぶりに、遺言通り遺産の半分を得ることができた。こうして彼はねばりにねばりぬいたのである。彼は反抗的で、周囲を白眼視し、鋭い皮肉をあびせた。

めでたさも中位なりおらが春  
 涼風の曲りくねつて来りけり  
 ずぶぬれの大名を見るこたつかな  
 遺産分配の時も、故郷の人たちを

雪の日や故郷人のぶあしらひ

故郷やよるもさはるも茨の花  
春風や底意地悪し信濃山

とよんだが、問題が解決すると、それまでのことは忘れたように

見限りし故郷の桜咲きにけり

とよむ一茶であつた。52才で家庭をもち、3男1女をえたが、次々に天死し、妻も亡くなつた。二度目の妻は三月あまりで離縁となり、三度目の妻を迎えた。火災にあつて土蔵の中に住み、懐妊の妻をのこして65年の忍苦の生涯を終えた。弱者に対する同情は生物にも及び、涙にぬれた苦悶の詩をよむ一茶でもあつた。

小言いふ相手もあらばけふの月 (やかましかりし老妻今年なく)  
 炉開て見てもつまらぬひとり哉 (妻におくれて)  
 をさな子や笑ふにつけて秋の暮 (母なき子の這ならふに)  
 かたみ子や母が来るとて手をたたく (亡妻新盆)

また、

これがまあ終の栖か雪五尺  
ともかくもあなたまかせの年の暮

とよむ一茶でもあつた。

しかし、兩人とも苦悩をこえて、悟りの境地に入つてゐるとは思えない。鬼城には一茶に見るような鋭い皮肉や反抗はない。苦悩を宿命と観じ、それに安んじ、まりに安易にあきらめの境地に逃げてしまつた。悪くとれば哀れを催させようとしているとも言える。句の調子が低いという評も受け入れざるを得ない。また句に深さが足りないということも言われるであろう。鬼城より一茶の方が、より境涯も深刻であり、妄執も深く、人間的苦悩も深刻であり、句もすぐれていると見るべきであろう。

### (五)

一茶について浅田氏は、大要次のようなことを述べている。

都市町人の文学であつた貞門では農民からの取材は極めて少なく、畑打・大根引といった季語さえ見出さない。談林も同様である。蕉風は農民生活の諸相を微細に描いたといわれるが必ずしもそうではない。蕉風を支持した農民は、直接鋤を持つて生産することのない農村の上層階級であつた。一茶は封建制の重圧の苦悩を全身にうけて苦んだ農民の姿、性格をさながらに、しかも野性的強烈さをもつて表現した。「米国の上々吉の暑さかな」等。鋤とる農民の心でもつて土をうたつたのである。一茶によつてわれわれは、はじめて土の詩人を見出すのである。(日本文学研究入門一俳諧一)

栗林農夫氏も「俳句と生活」の中で、これと同じような意見を述べている。しかし、わたしは次に引用する重友氏の意見に賛意を表したいと思う。

ややともすると、かれが庶民の、特に農民のための気概をはくものであるかのような言説が見られるのであるが、そのような広い視野に立つての、また深く意識しての見解がもたれていただけではなく、それはたまたま、かれが農民の一人として自己自身の困窮や厄難を訴えがちであるところからきた錯覚にすぎないのである。現

にかれば農民の対立者としての武士の存在に対して何の疑惑も、したがって何の反撥も感じることなく、かえってこれを是認し、その恩恵に感謝の念をさえ抱いていたのである。(近世日本文学史)

もちろん重友氏は一茶が伝統破りの句風を示し得たのは、農村の出身で農民の側から見た農村的景物が豊富にとりあげられたからであり、野趣の横溢していることも否定はしていない。要するに一茶は土の詩人であつたとは言えるであろう。庶民性があるといつても、それは自覚の上に立つてのものではなかつた。

俳句は最近になつて、やつと宗匠俳句から解放されて、庶民が自分の生活をはつきりと見つめ、それと取り組むことが出来るようになり、やつと社会性・思想性などが論ぜられるところにまでこぎつけた。

鬼城も自覚の上に立つて農村をよみ、庶民の生活をうたつたとは言えない。しかし、彼の句が境涯の句であり、庶民である作者の姿がよく写され、土の香のしみこんだ句であることは、前から評されている通りである。

柴門に大きな松を立てにけり  
何のかのと錢が入るなりお正月  
少しばかり山林もちて木の芽かな  
麦飯にいつまで熱き大暑かな  
庵主のさびしく蚤をふるひけり  
南瓜咲いて西日はげしき小家かな  
老妻のこたつに酔へるあくびかな  
いささかの金ほしかりし年の暮  
貸借もなくてめでたし大晦日

これらの句によつて彼の生活を察することが出来る。

小わらべの馬の鼻とる田搔かな  
生きかはり死にかはりして打つ田かな  
小百姓桑も摘まずに病みにけり  
小百姓の飯のおそさよ春の宵  
二三人くらがりに飲む新酒かな

「小百姓」という語を用いてよんだ句は相当多く、「小商人」も二三ある。小わらべの時分から、馬の鼻をとり、生きかわり死にかわり、土にいどみ朝早くからはたらいて、日の永い春の日でも夕飯もおそくなる庶民の生活を描いている。しかし、何の抵抗も感じてはいない。

そこそこに京を辞して逃げ帰る

涼しさや小便桶の並ぶところ

はん華な都会よりも、静かな田舎の小家に、小便桶の並ぶところに安住の地を見出している。

加藤楸邨氏は〔俳句〕第3巻第3号「鬼城の重量のある境涯の作には心うたれながら、根本のかなしきはわかつていても、その衣裳がびつたり膚にこなかつた。その時、私が邂逅出来たのが秋桜子先生であつたとし、秋桜子の「武蔵野の空真青なる落葉かな」をあげている。鬼城の句には艶味のあるものはすくない。

花散るや耳ふつて馬のおとなしき

◎闘鶏や花の下影こきところ

これらは彼の作としては華麗であるが読み返すと何か哀れつぽいものを感じさせる。

芭蕉は旅によつて心を深めていつた。鬼城はあまり旅はしていない。京都・奈良・伊勢・近江・東海道・北陸道をめぐり、四国の琴平のあたりまでは行つているが、現在としては大した旅ではない。旅の句もすくない。

てふてふや二見が浦のささら波

牡丹咲く加賀街道の宿屋かな

といつた程度である。

一茶の句に野趣が横溢しているのは、一つには彼が方言・俗語を使用したからである。

うまさうな雪がふうはりふうはりと 一茶

大螢ゆらりゆらりと通りけり

鬼城の句にも、これに似た表現がある。擬態語や擬声語を用いて、感動のリズムが声調となつているものも多い。また口語的な発想も多い。この表現がまた鬼城の庶民性を助けているといふことができる。

野を焼くやぼつんぼつんと雨到る

ゆさゆさと大枝ゆるる桜かな

をうをうと蜂と戦ふや小百姓

送火のゆらりゆらりと流れけり

街道をきちきちと飛ぶばつたかな

稲雀ぐわらんぐわらんとどらの鳴る

たんと食うて大きうなれや今年米

雑煮食うてねむうなりけり勿体な

### (七)

鬼城は聾であり、貧乏であつたが一茶のようにひねくれもせず、反抗もせず、それを宿命とあきらめて、苦しみながら世の片隅に小さく生きていつた。弱小なもの、殊に不具なものに、いたわりと深い愛情をよせている。一般的にいうと、悲哀の情を主観的に打ち出し過ぎているようである。生物をよんでも、老残の自己の影を濃く出し過ぎている。あまりに安易に、あきらめに陥つて、一茶の深い妄執には到底及ばない。人間的苦悩に於ても、句に於ても一茶には及んでいない。

いわゆる句俳優に陥ることなく、自己の境涯を中心として、自覚の上に立つたものではないが庶民的な句をよんでいる。一茶に似た特異な存在であるが一茶には及ばない。しかし、われわれ庶民の胸をうつ、いくつかの、いい句を持つ作家であることは否定できない。

(註) 引用の句は、「定本鬼城句集」(昭和18年刊、三省堂版)によつた。同集には「鬼城句集」(大正15年刊、鬼城62才)1844句、「続鬼城句集」(昭和8年刊、70才)349句、「第三鬼城句集」(未刊行)より113句、歿前3・4ヶ月の句を集めた別冊より10句をえらんである。「第三鬼城句集」以後の句は虚子の選である。「鬼城句集」「続鬼城句集」中には、刊行後、作者に於て字句を改めたもの5・6句、抹消せるもの1句ありという。作句の年時は、はつきりしないが、「鬼城句集」の句はそのままとし、「続鬼城句集」の句には○印を、「第三鬼城句集」の句には◎印を、別冊のには△印を附しておいた。